

作品介绍——《西京地方名所写真帖》 —明治中期における京都の写真について

木谷 知香

はじめに

当館には、明治期から大正期にかけて日本各地から皇室へもたらされた写真が残されている。その中には、優品ながらも制作者や制作背景が不明な作品も多い。本稿で紹介する《西京地方名所写真帖》（以下、本作とする）もその一つであり、明治中期の京都を中心とした写真を五十枚収載した、蒔絵を施した表紙を持つ写真帖である。本稿では収載写真の性質や内容を精査するとともに、その制作過程について推論したい。

一、《西京地方名所写真帖》の装丁および収録写真

本作は、「西京地方名所写真帖 一冊」と墨書された木箱に納められている。本作の名称はこの墨書に拠るが、木箱が侍従職発注による作製と推測されることから、この名称を誰がどの段階で付したかは不詳である。洋製本仕立ての写真帖の表裏には、全面に黒漆を施した木材をあて、牡丹と花喰鳥を金蒔絵で表す（図1）。写真帖の寸法は、短辺二〇・六×二一・四×長辺二六・七×二七・二cmの範囲に収まる。写真は五十



図1 《西京地方名所写真帖》表紙



図2 仙洞御所御庭 (No.1)

枚すべてが鶏卵紙による焼き付けであり、中には褪色や虫損が見られるが、全体としての状態は良好である。

収録写真の地域別内訳は、京都四十一枚、奈良五枚、滋賀四枚であり、各写真下に墨書にて被写体名を記している（図2）。なお、本稿末にすべての写真画像を掲出したのでご参照いただきたい。

各写真の撮影者は不明であるが、本作収録写真の特徴として、約半数の写真の左下ないし右下にラベル枠を焼き込み、そこに被写体名や解説を日本語と英語、または英語のみにて記している。このラベル枠の形態に統一性がないことから、複数の撮影者および販売者が関与したものであることが推測される（図3、註1）。

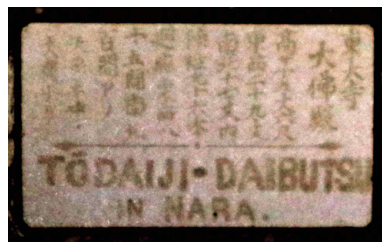


図3 大和国奈良大仏殿 (No.45) の焼き込みラベル
※可読性を高めるため、濃度調整を行った。

二、横浜写真アルバムとの共通点・相違点からみる《西京地方名所写真帖》の特徴

前章にて挙げた本作の特徴は、幕末から明治期にかけて外国人向けの土産写真として隆盛を極めた横浜写真アルバムと共通する。横浜写真は、文久三年（一八六三）頃に横浜で写真館を開いたチャールズ・パーカーやフェリーチェ・ベアトによって販売され、慶応四年（一八六八）頃からは横浜写真をアルバムに仕立てるようになった。ベアトの帰国後には、ライムント・フォン・シュティールフリートやアドルフ・ファルサーリら外国人に加え、玉村康三郎や日下部金兵衛ら日本人写真師が横浜写真を手掛けるようになる（註2）。

横浜写真アルバムは、日本の名所や風俗、または市井の写真を五十枚収録する形態が多く、表紙のデザインも富士山や人力車のように日本の風景、風俗などを蒔絵にて表したものが有名である。また、各写真には外国人向けに英語の被写体名が付されている点も大きな特徴である。本作の一部の写真が、他機関所蔵の横浜アルバムに収録された写真と同一もしくは酷似していることから、本作が横浜写真アル

バムを基盤としていることは間違いない。黎明期の横浜写真の被写体は、横浜周辺や江戸（東京）が中心であり、明治初期まで外国人の立ち入りが禁じられていた京都は、それ以降に被写体に加えられる（註3）、その数を増加させたのである。

しかし、本作には横浜写真アルバムとは異なる特徴も見出せる。その一つが写真に着色がされていないこと、もう一つが明治二十八年（二八九五）に開催された第四回内国勸業博覧会や平安遷都千百年記念祭など、特定の事業を記録した写真を含むことである。

横浜写真は、日本にきたことのない外国人が手にすることを想定して、写真に着色が施されていることが多い。また、横浜写真の被写体は前述のとおり、外国人が興味を持つ日本の風景や風俗である。したがって、それとは性質を異にする第四回内国勸業博覧会や平安遷都千百年記念祭に、本作の制作目的があると考えられる。

三、第四回内国勸業博覧会および平安遷都千百年記念祭と明治天皇

第四回内国勸業博覧会および平安遷都千百年記念祭は、明治二十八年（二八九五）に京都で開催された大事業である。まず、記念祭の開催が明治二十五年五月に決定し、あわせて内国勸業博覧会の誘致が進められた。内国勸業博覧会は、第一回から第三回まで東京で開催されていたが、第四回については東京や大阪との競争の末、京都で開催されることが決定した。博覧会の会場となった岡崎には、美術館をはじめ工業館、農林館、機械館、水産館、動物館が建設されるとともに、記念祭の象徴として大極殿が復元された。これが後の平安神宮となる（註4）。

そして、明治二十八年四月一日に第四回内国勸業博覧会が開催された。明治天皇は、明治二十七年に勃発した日清戦争の指導のため、同年九月から翌年の五月まで広島大本営に滞在しており、その帰途、京都を訪れた。そして、五月二十四日に博覧会場へ行幸したのである。なお、記念祭も明治天皇臨幸の下、四月三十日に開催される予定であったが、明治天皇の急病などの事情により十月に延期された。

この両事業は、明治二年の東京奠都以降、衰退しつつあった京都の近代化の成果を示し、さらなる活性化を企図するものであった。明治天皇は、明治十年の京都行幸時に、京都御所周辺の荒廃を目の当たりして深く嘆惜し、同年から十二年間にわたり御手元金四〇〇〇円を下賜して、京都御所周辺の保存を京都府に命じた（註5）。以後、明治天皇の意向を反映する形で、明治十六年一月に岩倉具視が「京都皇宮保存に関する建議」を行い、伝統的な京都の復興が模索される一方で、明治十四年に京都府知事に就任した北垣国道が主体となって琵琶湖疏水事業を行うなど、近

代的な土地整備が進められたのである。

このように、京都の復興が少しずつ進捗し、第四回内国勸業博覧会や平安遷都千百年記念祭の活気に沸く京都の姿を明治天皇に報告することは重要なミッションであり、本作制作の背景にも繋がるのではないかと推定される。

四、京都観光ブームと写真

第四回内国勸業博覧会および平安遷都千百年記念祭は、京都観光ブームの火付け役となった。このブームは、同時期に発達した写真印刷技術と結び付き、結果として京都を被写体とする写真集の刊行が頻発した（註6）。その初期の作例と目される広池千九郎著『京名所写真図絵』（便利堂発行、一八九五年）は、第四回内国勸業博覧会のガイドブックとして作成されたもので、博覧会場や京都の名所、祇園祭の写真図版を掲載するなど、本作と極めて近い性質を有する。また、『京名所写真図絵』とそれに続く写真集の中には、わずかながらも本作と同一の作例を見出すことができる（註7）。

横浜写真を観光写真の系譜として位置付ける諸研究が存在するが（註8）、まさに明治中期以降の京都においては、観光ブームを後押しする材料として、横浜写真が使用されたのである。

五、《西京地方名所写真帖》の収録写真に関する考察

本章では、本作に収録された各写真について詳細に見ていく。収録写真の特徴は前述したとおり、京都周辺の名所や風俗に関して撮影したものを中心としつつ、第四回内国勸業博覧会に代表される京都の大事業を記録したものである。

その中で皇室を意識したのが、巻頭の「仙洞御所御庭」（No.1）であり、八ッ橋や南池を望む景色をカメラに収めている。この写真も日本語と英語のラベルが付されていることから、元来は販売用の写真であろう。その後、続く写真は、洛北の上賀茂神社からはじまり、嵐山、伏見、東山と京都を巡って、岡崎の博覧会会場および大極殿にたどり着く構成となっている。そして、その後に京都市街以外の写真を付け加えている。このことから、写真の貼付を伴う制作段階において、博覧会および記念祭関係者が関与



図4 三条大橋納涼（No.31）部分



図6 洛東円山全景 (No.28) 部分
※右端が明治27年に増設された也阿弥ホテルのペランダ付き4階建ての建物である。



図5 洛西島原出口柳 (No.11) 部分

取り込み、人々の風俗や生活を撮影している。「東福寺通天橋楓」(No.16)では、洗玉潤脇に足場を組み、紅葉を楽しむ人々がカメラに顔を向けている。同様に、「三条大橋納涼」(No.31)では、橋下に納涼床を出して料理を楽しむ人々の日常が写し込まれている(図4)。

収録写真すべてが同時期の撮影ではないと思われるが、一部の写真については撮影時期が比定できる。例えば、「洛西島原出口柳」(No.11)の島原大門に掛けられた提灯に「年記念祭」と記されていることから、記念祭前に撮影された写真と目される(図5)。また、「大谷派本願寺」(No.13)の写真では、建設中のためか、足場の組み立てられた阿弥陀堂が写る。同堂の完成が明治二十八年であることから、その直前の撮影と推察される。さらに、「五条大橋」(No.20)の写真は、多くの人々が橋の上でカメラに視線を向けているのが特徴的であるが、同橋は明治二十七年に架け替え工事が終了した、高欄に擬宝珠の付いた木橋である。そして、「洛東円山全景」(No.28)には、明治二十七年に増設された也阿弥ホテルのペランダ付き四階建ての建物が写っており、それ以降の撮影と断定できる(図6)。

また、博覧会および記念祭関係の写真は、本作制作のため、明治二十八年に撮影されたものと見て良いだろう(註9)。以後、刊行される京都の写真集には、明治中期に完工し、近代化の象徴となった琵琶湖疏水や蹴上インクラインなどに関する写真が選択されていることから、それらを含まない本作が明治三十年を越えない時期の制作であることを示唆していると思われる。

なお、本作の末尾に貼付された京都市街以外の写真のうち、二枚については写真

していた可能性が指摘できる。

また、風景を撮影する際に人物を積極的に

下の墨書に誤記が見られることから、その地域に明るくない者が記した可能性が考えられる。

おわりに

制作者や制作背景が不明である本作を、第四回内国勸業博覧会や平安遷都千百年記念祭に際して皇室へもたらされた作品と断ずるのは、収録写真の内容や貼付順から鑑みれば、比較的容易である。加えて本稿では、明治初期～中期における京都の歴史や写真史の上から考察することで、左記の様相を浮かび上がらせた。

本作は、当館が所蔵する明治時代以降の写真資料同様、治績や事業報告を目的として献上された記録写真に括られる。しかし、本作に限って言えば、衰退した京都の姿に憂慮する明治天皇に対し、復興しつつある京都の姿を伝えるという側面も付与されていたと考えられる。

その側面は収録写真からも窺える。その多くは、明治中期の京都で増加していた横浜写真の系譜を継ぐものであると同時に、明治中期以後にブームとなる京都観光を促すような内容のものであった。これらは元来、外国人向けに撮影された名所や風俗写真であったが、古来より京都に根差した寺院や景勝地の変わらない有様と、その中で生き生きと生活する人々の姿は、明治天皇への報告に具体像を与えたと思われる。一方、博覧会や記念祭、明治二十年代後半に増改築された橋やホテルなどの写真は、衰退から一転、近代化へ向けて発展する京都の現状を伝える材料として選択されたと推測される。

最後に、本作収録写真の半数以上は、管見の限り、他作品に同一写真が見出せなかった。このことから、本作収録写真は明治中期における京都周辺の歴史を物語る資料としても注目すべきであろう。

(当館学芸室研究員)

註

(1) 植田憲司『京都名所撮影』と桑田正三郎(『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第三十集、京都府京都文化博物館、二〇一八年)に拠ると、写真の販売を専門とする写真舗の存在は東京では明治六、七年頃に、京都では同十一年頃から確認されている。また、緒川直人「写真舗清新社時代の桑田正三郎―明治中期迄における写真の大衆化の側面―」(広島史学研究会編『史学研究』第二七四号、二〇二二年)では、写真舗が自家製品の印として使用したラベルを写真に焼き込んでいることを指摘するとともに、京都の写真舗の一人である桑田正三郎のラベルに注目している。同論文に拠れば、桑田のラベルは、四角型の

梓の upper 段に和文による被写体名と解説、下段に英文による被写体名を配するものである。本作の収録写真のうち、「大和国奈良大仏殿」(No.45)はこの条件を満たしていることから、桑田の店舗で販売されていた可能性が高い。

(2) 横浜写真については、左記の文献を参照した。

・横浜開港資料館編『明治の日本《横浜写真》の世界 彩色アルバム』有隣堂、一九九〇年。
 ・佐藤守弘「観光・写真・ピクチャレスク―横浜写真における自然景観表象をめぐって―」『美学芸術学』第十六号、美学芸術学会、二〇一一年。

・井椋直美「外国人がお土産にした横浜写真」小沢健志監修、高橋則英編集『レンズが撮らえた 日本人カメラマンの見た幕末明治』山川出版社、二〇一五年。

・斎藤多喜夫「幕末明治横浜写真館物語」オンデマンド版(歴史文化ライブラリー 一七五)、吉川弘文館、二〇一九年。

(3) 中川馨「観光と京都―明治期の写真集にみえる京都―」京都映像資料研究会編『古写真で語る京都 映像資料の可能性』淡交社、二〇〇四年、八十一頁。

(4) 小林丈広「平安遷都千百年記念祭と平安神宮の創建」『日本史研究』第五三八号、日本史研究会、二〇〇七年)に拠ると、大極殿建設には宮内省からも二万円が下賜された。

(5) 『明治天皇紀』第四、吉川弘文館、一九七〇年、四十八頁。また、翌明治十一年に再び京都を訪れた際にも、明治天皇は京都御所周辺の荒廃ぶりに痛惜し、その保存策として大札儀式を京都で行うことなどを提言した。なお、伊藤之雄氏は、『京都の近代と天皇 御所をめぐる伝統と革新の都市空間 一八六八―一九五二』(千倉書房、二〇一〇年)の中で、当該期における明治天皇の度重なる京都行幸の理由を、「京都御所周辺の伝統をふまえた革新、鉄道工事など京都に関する革新などへの関心」にあると言及している。

(6) 中川氏、前掲論文(註3)、八十六―九十六頁。

(7) 『京名所写真図絵』に「洛東清水寺本堂」(No.23)と同一写真、野口保興編『地理写真帖』内国支部第三秩(東洋社発行、一九〇〇年)に「三条大橋納涼」(No.31)と同一写真、笹田駒治著『京名所写真真帖』(村上勤兵衛・杉本甚之介発行、一九〇三年)に「東福寺通天橋楓」(No.16)と同一写真が収録されている。

(8) 佐藤氏、前掲論文(註2)。中川氏、前掲論文(註3)。岸文和「明治二八年の写真術―『京名所写真図絵』に見る観光のまなざし―」『文化学年報』第六十一輯、同志社大学文学部、二〇一二年。

(9) 本作収録写真とは異なるが、第四回内国勸業博覧会の写真は桑田正三郎も撮影している(桑田正三郎編『第四回内国勸業博覧会写真』一八九五年)。なお、「第四回内国勸業博覧会美術館」(No.38)と「大極殿正面」(No.40)は、京都府立京都学・歴史館に寄託される石井行昌撮影写真資料の中に同一写真が見られるが、いずれも石井が複写もしくは購入したものであると考えられる。

謝辞

本稿の執筆に当たり、京都府立京都学・歴史館の若林正博氏、大瀧徹也氏、京都府立大学の 大塚活美氏、京都文化博物館の植田憲司氏には、本作に関連する写真や文献資料の調査 に関してご協力頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

《西京地方名所写真真帖》収録写真

各写真に付された番号は、本作における貼付順を示すとともに、本文中の「No.(番号)」に 対応する。また、各写真の名称は本作収録写真下に記された墨書に拠るが、墨書に明ら かな誤記がある場合などは、適宜、筆者注記を加えている。



3. 洛北金閣寺



2. 洛北上加茂神社



1. 仙洞御所御庭



6. 保津川落合石門



5. 二条離宮



4. 洛北北野天満宮



9. 嵐山渡月橋



8. 保津川



7. 保津川



12. 本派本願寺



11. 洛西島原出口柳



10. 嵐山渡月橋畔



15. 東福寺



14. 伏見稲荷神社



13. 大谷派本願寺



18. 洛東豊国神社



17. 大仏三十三間堂



16. 東福寺通天橋楓



21. 洛東清水寺
舞台側面



20. 五条大橋



19. 洛東西大谷



24. 同清水寺境内



23. 洛東清水寺本堂



22. 洛東清水寺全景



27. 円山公園夜桜



26. 八坂神社
祭礼ノ鉦



25. 八坂神社表門



30. 知恩院山門



29. 知恩院本堂



28. 洛東円山全景



33. 慶流橋ヨリ博覧会場望



32. 蹴上ケヨリ博覧会場遠望



31. 三条大橋納涼



36. 同場内式場



35. 第四回内国勸業博覧会場内



34. 第四回内国勸業博覧会場表門



39. 大極殿応天門



38. 第四回内国勸業博覧会美術館



37. 同其二



42. 山城国宇治平等院



41. 比叡山延暦寺中堂 ※大講堂の誤り



40. 大極殿正面



45. 大和国奈良大仏殿



44. 大和国奈良春日神社手洗所



43. 大和国奈良春日神社



48. 近江国石山寺



47. 大和国奈良南円堂 ※北円堂の誤り



46. 大和国奈良猿沢池畔



50. 近江国大津三井寺



49. 近江国勢田川ヨリ石山寺遠望

- ・三の丸尚蔵館年報・紀要中、作品名や作者、制作年などの表記は、年報・紀要発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館年報・紀要の著作権は宮内庁に属し、本ファイルを改変、再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館年報・紀要（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は、書籍と同様に¹出典を明記してください。また、図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は、宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお、図版を営利目的の販売品や広告、また個人的な目的等で使用することはできません。

三の丸尚蔵館年報・紀要

第29号

令和4年度

編集：宮内庁三の丸尚蔵館

（東京都千代田区千代田1-1）

発行：宮内庁

制作：株式会社アイワード

（札幌市中央区北3条東5丁目5番地91）

翻訳：株式会社イー・シー

令和5年6月30日発行